山口県柳井市平郡島の生活語諸相

岡野信子

はじめに

訪れた土地で、いきいきと語られる生活語と出会う時、これを活写する方法はと、しきりに思う。この稿では、九三年六月二十五日・二十六日に訪うた平郡島の生活語を、音声・表現法・語彙、そして命名と呼称の視点から考察し、報告する。この調査は山口県史民俗篇の一調査としておこなったものである。稿をなすにあたっては先行の報告・研究も多く参照させていただいた。

平郡島は多島海である瀬戸内海の西部域の島で、周防大島の南西に位置している。周囲約二十八キロメートルの、東西に長いこの島の東端には浦と羽仁（はに）、西端には伊場（いば）と鶴甫（つるほ）の集落が、それぞれ狭い平地に一つづきにある。この東西の集落は成立の事情が異なると言われており、婚姻関係もまれである。

島のおもな産業は農業で、漁業を主とするという浦地区も半農半漁といった状態である。以前は島のほぼ全戸が牛を飼育して島外に売っていたが、今は牛の姿をまったく見ない。

この島は昭和二十九年（一九五四）に柳井市に合併する以前は大島郡平郡村であった。藩政期には萩藩の御手舸子（おてかこ）で、本土域の三田尻に交替勤務をしていたという。島の全戸が士分であった。

一九九三年七月現在、島の人口と世帯数は東が五一七人、二七六世帯、西が三一二人、一六二世帯である。約五十年前の一九四〇年には東西合わせて二八〇九人、五八九世帯であった。人口減がことに著しいのは青壮年者が本土域に職を求めているためである。

島には現在柳井港から一日二回の定期船があるが、西までは約一時間、東の浦にはさらに四十分の航程であるから、本土への通勤、通学はできない。もっとも本土域に出ることは以前からさかんで、外住、あるいは季節奉公の経験者は多い。

この島の人々は生活語の東西差を語る。現況ではたしかに差違も認められるが、それはどのように判断されるべきものであろうか。虚心に見ていきたい。以下にとりあげた生活語の右傍線はアクセントの高音部である。今回の調査に話者として御協力くださったのは、東の境元明（一九一三年六月生）・境ヒデコ（一九一八年三月生）、中村留代（一九二〇年四月生）、羽根キソエ（一九一八年六月生）、西の浅海心一（むねかず）（一九一三年九月生）・小形マツコ（一九〇九年七

月生）・田村正光（一九一一年七月生）・中村光久（一九一九年一月生）の諸氏である。同行してくださった県史編さん室の金谷匡人氏にも種々御配慮をいただいた。また以下の記述の中にあげるように、多くの方々の御教示をいただいた。あわせて感謝申しあげる。

一　音　声

。アンラー　ミヅァー　ナエ　ガ。（あら、水はないよ。牛が飲んでしまった）〈東〉

。ナンキャエモナンキャエモ　ヌッチェ、（何回も何回も塗って）〈東〉

このように東のことばには音声上にさまざまの特色が見られた。以下にそれらのいくらかをあげる。西とことわらないものはすべて東の方言である。

1　[ai] 連母音の相互同化・順行同化・非同化

シャエ（菜）・イッパェエ（一杯）・サェーサェー（再々―たびたび）・ナエ（ない）タカャエ（高い）・キャエタ（書いた）・ケータ（書いた）

東の高年者はこのような [ai] 連母音の相互同化音をよく口にする。もちろん改まっては非同化音で言うこともある。一方、西では名詞は非同化音で発音されるが、男性は形容詞・動詞は「アサー」（浅い）・「カータ」（書いた）「オモイダータ」（思い出した）などと、順行同化音で言うことがあった。[ai] 連母音の発音のこのような東西差は『瀬戸内海言語図巻』[1] 上の平郡島にも見られる。平郡西はこの図上では形容詞もすべて非同化音であるのは、話者が女性であるためであろう。[2]

ところで『山口方言　方言資料集Ⅱ―平郡島西浦方言―』（以下『西浦方言』と略記）には、「ダェードコロ」（台所）・「ヤマェーモ」（山芋）・「イタェー」（痛い）・「マェータ」（参った）のような相互同化音の語が、「自由会話編」にも「語彙編」にも続出して、非同化音の語はまず見られない。なお、「ヒヤー」（冷い）・「アサー」（浅い）など、順行同化音の語もいくらか見られるが、著者はこれを壮年層の発音であると説明している。この書物は一九八一年の調査にもとづいて書かれており、主たる話者は一八九五年生と一八九八年生の女性二人、その一人は著者の祖母である。

この書物と今回私の聞いたものとの [ai] 連母音状況の差違は次のような事情によるのであろうか。平郡は以前は東西ともに相互同化音を言っていた。が、やがて西では非同化音、つまり共通語音で言う傾向が優勢になる。ただし男性はくだけた会話では形容詞・動詞は順行同化音で言うこともあり、意志・推量の助動詞「まい」は常に「マー」である。これは周防東部沿岸域の発音状況にならったもの、つまり地方共通語化であろう。

ところで『瀬戸内海言語図巻』の平郡島西の調査は一九六二年、話者は六十七歳の女性であるから、『西浦方言』の話者と同年令、しかも調査は約二十年早い。でありながらこちらが共通語音であるのは、初対面の外来者に答えている、すなわち改まり意識での発音といった事情、また話者の共通語好みといった事情があるのかもしれない。

2　シェ・ジェ・ジョ・チェ・ヂェ音

シェーカツヒ（生活費）・シェンバイ（千杯）・ユーシェンテキ（優先的）・ジェン（銭）・ジェンジェン（全然）・ジョーリ（草履）・チェボ（てぼ―藁やブンゴガヤで編んだ篭）・エチェ（得手）・ヂェン（出ん）・ツンヂェ（積んで）など。

なお、「カラチ」（空手）・「イッチ」（行って）など、共通語の「て」相当の「チ」を聞くこともある。

3　ツゥ・トゥ・ヅゥ・ドゥ

[tsu] と [tu] の中間的なきこえの音、[dzu] と [du] の中間的なきこえの音を右のように表記してみた。

ツゥナ（綱）・テトゥ（鉄）・トゥク（付く）・ウトゥ（打つ）・ミドゥ（水）・カヅゥ（数）・イッポンヅゥリ（一本釣り）など。

この「ヅゥ」、「ドゥ」は、「ず」と「づ」を区別するものではなくて、常にこのような発音になりがちである。『瀬戸内海言語図巻』（以下『図巻』と略記）にも、東の羽仁の女性のことばが「ツゥイ」（梅雨）・「ツゥバメ」「トゥバクロ」（つばめ）・「ウヅ」（渦）と表記されている。

4　「ン」音の多出

コガイン　サカナ（こがいな魚）・キレーンジャケ（きれいなじゃけ）・クラエウチン　オキテ（暗いうちに起きて）・ドコンカ（どこにか）・ウシン　クサ（牛の草）・ヤスミン　トキ（休みの時）・アンブネ（網船）

これらは「ナ」「ニ」「ノ」「ミ」の母音が落ちた「ン」音節である。

ウンニ　クル（売りに来る）・カンニ　イク（刈りに行く）・オアガンサエタ（お上がりされた）

このように「リ」も「ン」になって軽く発音される。

クングル（くぐる）・ゴンブン　クツゥ（ゴムの靴）・カンマン（かまわぬ）・アンラー（あら―驚きの声）

これらの第二拍の「ン」は渡り音の聞こえのものである。

5　連　声

ヨーザンノ　ヤル　トコ（養蚕をする所）

助詞「を」が「ン」音に終わる語に続く時に「ノ」となるのは、いわゆる連声である。東で二日間に聞いた連声のものはこの一例だけであるから、あるいは偶然のものであるかもしれない。

6　第一拍の長音化

カーリー（かるい）・シーコナ（しこな―あだな）・シーヨル（しよる）

以上は東で聞いたもので、西では今回の調査では聞けなかった。ただし『西浦方言』には、連声以外のすべてが見られるので、現在の西の状況は共通語音化の結果と考えられる。これら以外の、たとえば「ヨーダ」（呼びた）・「ノーダ」（飲みた）の類、また「デンダイ」（ぜんざい）・「セードー」（製造）の類は、現在、東でも西でも優勢である。すなわち、本土域の山口県下にも優勢なマ・バ行のウ音便、ザ・ゼ・ゾがダ・デ・ドになりがちな状況は、平郡でも東西を問わず根強い。

一方、「ナリマシタ」、「オリマセン」のような、早上がり、早下がりの文音調、いわゆる山口アクセントは東でも西でも耳にしたが、さほど優勢ではなかった。土地人どうしの日常会話では「～マス」「～ゴザイマス」体で言うことが比較的少ないためであろうか。

二　表現法

表現法ではまず敬語法を見た後に、いくつかの注目点をとり上げてみる。

1　敬語法

(1)　「オンジャル」

今回の調査では得られなかったが『柳井市平郡島史』[3]一三四頁に「おんじゃるか（おられますか）」、「おいじゃある（行かれるか）」が見られる。また『方言敬語法の研究』[4]一〇七頁に、平郡島に「オンジャル」、「オンジャッタ」、「オンヂャラン」の言いかたがあるようだとある。

『西浦方言』には本動詞としての用法のものは見えないが、「キチョンジャル」（来ておられる）、「セーヨンジャッタ」（しておられた）など、補助動詞としての用法のものがある。今回は東・西ともに自然会話の中でも、また質問法によっても得られなかった。

(2)　「～サレル」・「～ンサエ」

◦オアガンサエマシタ。〈訪問辞。時間はかぎらない〉〈西〉

◦オシマイサレマシタ。〈夜の訪問辞〉〈西〉

高年者の丁寧なあいさつことばの中に「～されます」敬語が見えている。ややくだけては「ます」を添えずに「オアガンサレタ　ノー」、「オアガンサエタ　ノー」のように「サレタ」「サエタ」と言う。

◦モチート　ハリコミンサエ　ノ。（もう少し高値をつけなさいな）〈西〉

◦コッチー　キテ　ハナシンサェエ　ヤ。（こっちに来て話しなさいよ）〈東〉

◦オチャジャー、ノミサイ。（お茶だよ、飲みなさい）〈西〉

日常会話の中ではこのように命令形しか聞けず、「～ンサエ」が多用されていて、「～サイ」を聞くことは少なかった。以前は老人は「カインサレー」のように「～ンサレー」も言っていたという。

これらの「～なさる」、「～なさいます」敬語は東でも西でも対者敬語であって、他者をこの敬語で遇するのは聞けなかった。

(3)　「～ヤル」・「～ヤール」

◦ソリャー　ワカランユー　トコニ　ツカイヤル。ヤクニタンユー　トコニャ　ツカイヤラン　デ。（「ヤクセン」ということばは「それはわからない」という意味の所に使われる。「役にたたない」という所には使われないよ）〈西〉

◦チョーナンオ　ミナ　アニ　イーヨリヤッタ。（長男をみな「兄」と言っておられた）〈西〉

◦イロイロノ　ハナシオ　セヤール　ノー。（いろんな話をなさるねえ）〈西〉

このように「～ヤル」「～ヤール」敬語を言うのは西で、東は言わない。これは第三者敬語として頻出し、相手敬語としては聞けなかった。「～ヤル」「～ヤール」敬語は山口県の本土域では広域で用いられている。

(4)　「おらすんですか」

『柳井市平郡島史』一三四頁に「おらすんですか―ご免ください（訪問の挨拶）」がある。この「す」は「シャル（せられる）」を軸として生まれた「ス」であろうか。九州で栄えているこの「ス」を、私は山口県下ではこれまで聞いていない。平郡島でも今は言わない。

(5) 「～テジャ」・「～チャッタ」・「～テ」

。ダレモ　ユーテクレテジャガ　ネー。（誰もが言ってくださるけどねえ）〈西〉

。オモイチガイ　シチョッテンジャロー。（思い違いをしておられるんだろう）〈東〉

。イマ　イキョーッチャッタ。（今、行っておられた）〈西〉

。オッテン　トキワ　カナラズ……。（おられる時はかならず）〈西〉

「～テジャ」の類の敬語はこのように東でも西でも、主として話題の人物への敬語として用いられているが、その使用は県下本土域ほどにさかんではない。

これらのほかに「レル」「ラレル」敬語も「ナガイ　コト　ヨソオラレタ　ジャ」（あの人は長らく他地に居られたじゃないの）のように用いられている。共通語意識で口にしているようである。

(6) 「ツカサエ」・「ツカンセー」

。ワラー　ツカサェー。（わらをください）〈東〉

。セケンニャ　イワザッテ　ツカンセー　ヨ。（島外には言わないでくださいよ）〈西〉

「ツカンセー」は「つかさいませ」の縮約形である。あらたまったあいさつでは「ドーゾ　キテ　ツカサリマセー」のように、くずれない形の「ツカサリマセー」を言う。東・西ともに、謙譲の動詞、補助動詞として用いている。

(7) 「ござります」系の丁寧語

。オウチンデゴザリマス。〈東〉

丁寧語「ゴザリマス」を言うこのことばは、昔は一般的な訪問辞であった。後には嫁もらいの訪問など、特別に改まった場合にかぎって言っていたが、今は言わないという。

。ドーモ　ドーモ　ゴクローサンデゴザイマシタ。〈西〉

これは外来者である私どもを見送るあいさつで、「ゴザイマシタ」が見える。

。オサムーゴザンス。〈西〉

「ゴザンス」については「めったに使わないが、あることはある」という説明があった。

。オハヨーゴイス。〈西〉

「ゴイス」も現在は高年者のあいさつことばに聞かれる程度の使用である。『西浦方言』一八八頁には、短縮形として「ソーデ　ゴー」のような「ゴー」も見えている。

尊敬・謙譲・丁寧の動詞・補助動詞はこのように用いられている。

2　二、三の文末詞

(1) 「ノーマイ」と「ノンタ」

。ヨー　フル　ノーマイ。（雨がよく降るねえ）〈西〉

「ノーマイ」は「のうお前」で、相手に共感を求める心情を託した文末詞である。東ではこれを言わない。東の人々が西のことばだと指摘するのは、この「ノーマイ」と敬語助動詞「ヤール」である。

柳井市教育委員会文化財室の福本幸夫氏の御教示によれば、柳井市も本土域ではこれを言わない。一方、大島郡橘町西安下庄の木谷裕氏からは「主として漁業集落で五十歳代以上の人々の日常会話に

は聞かれる」とお教えいただいた。また県史編さん室長伊藤彰氏から「唐松良生さん（山口県立柳井高校教諭）のお父さんの御教示では安下庄の三ツ松という漁村で使うそうです。これは年長者に言うことばで、同輩や若者には「アツイ　ノーワレ」と言うそうです」とうかがっている。

九州ではよく聞く「のうお前」文末詞を、私は山口県の本土域ではまだ聞いていない。『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）』[5]四七五頁には「中国地方にも、島根県その他には、熟した「オマイ」文末詞が見いだされる」とある。山口県域では「ノンタ」（のうあなた）が栄えた。平郡の東でも西でもときにこれを言うが、人々はこれは本来の島ことばではないと自覚している。

(2)　「ワー」と「ワ」

◦ミタ　ヒトガ　オイー　ワー。（見た人が多いよ）〈東〉

◦ミナ　ヒトガエー　ワー。（みんな好人物だよ）〈東〉

◦ワシラー　ミツニーチュー　ワ。（私どもは光兄と呼ぶよ）〈西〉

◦コヤー　ツクッチョッタ　チワ。（小屋を作っていたということだよ）〈西〉

東の「ワー」と西の「ワ」はともに「われ（我）」系の文末詞であるが、そのきこえはかなり異なる。東には「アレラー　タコクリジャッター」（あの人たちは蛸くりだったよ）のような言いかたもある。「ワー」の文末音調は山口県域では私はあまり聞いていない。

(3)　「トオモイ」・「トミー」

◦コッチー　クルナー　エー　ガノーヤ。ミヤジマグチー　オリテモ　ノー。　ガンギオ　アガッタリ　サガッタリ　セルノガヤレン　トオモイ。（こちらへ来るのはいいんだけどねえ。電車の宮島口駅で降りてもねえ、石段を上ったり下がったりするのが大変なんだよ）〈西〉

◦オマエカタン　ウシャー　シンダ　ンノ。ウチノ　ウシモトートー　シンダ　トミー。（お前の家の牛は死んだのかい。私の家の牛もとう〳〵死んだんだよ）〈東〉

告知の文末詞「と思え」、「と見い」は東も西も言う。これは山口県の本土域でもよく聞く。

3　話題持ちかけの間投話部「ミンサイ」

◦ナガミニ　ミンサイ、ハチゴロー　イワノシン　ハチゴロー　イワノシン　…（長見家ではほらね、八五郎、岩之進、八五郎、岩之進と、名前を継いでいく）〈東〉

◦ムカシャー　ミンサイ　ゲタヤ　ヤリオリャータ。（昔はそら、下駄屋をしておられた）〈西〉

本題に入ろうとして注意を喚起する「ミンサイ」は、これも東・西でともに言う。

4　「〜ユー　モンジャ　ナイ」

◦フエルチュー　モンジャ　ナインジャケ。（盆には、島は人口がふえるどころではないんだから。皆帰ってくるから大変な人数になる）〈西〉

◦カツエチョルンジャケ。ショクリョーガ　ノーテ。イヤ　クーユーモンジャ　ナイ。（当時は皆飢えているんだから。食糧がなくて。だから島に訪ねて来た戦友の食べぶりはすさまじかった）〈西〉

程度の甚しいことを「〜ユー　モンジャ　ナイ」と表現するのは西で聞いた。

5　二、三の助詞・助動詞

(1)　「〜トサイガ」

。オイ　ベニ　ベニ　コイ　コイチュートサイガ　エサー　モライニ　クル。（おい、べニベニ（牛の名）来い来いと言うと、餌をもらいに来る）〈東〉

。カラスガ　ナクトサイガ　モー　カラスオ　アイズニ　オキル。（烏が鳴くと、もう烏の鳴き声を合図に起きる）〈東〉

「〜トサイガ」を東ではよく聞いたが西では聞けなかった。ただし福本幸夫氏の御教示によれば、「西も一部では言う」ということである。

山口県域では珍しいこの「トサイガ」は、一九三一年の『山口県柳井町方言集』[6]に見えている。福本氏のご教示によれば、今は柳井・日積・余田では言うが、伊陸・新庄・阿月・伊保庄では言わないという状況である。

(2)　格助詞「ニ」の用法

。ウチラー　アノー　アニキニ　キチノジョーデショー。（私の家ではあのう、兄貴の名が吉之丞でしょう、ね）〈東〉

。ミンナガ　ジゲニ　ハナスノガ　ノー。（皆がこの集落で話すのがねえ）〈東〉

。ナガミニ　ミンサイ……（長見の家では、ほらね、……）〈東〉

。アンタンデス　カ。（おられますかー買物の店先でのおとない）〈西〉

「アンタン」の「ン」は「に」が母音を落とした形である。これらを見ていると、「ニ」は本来、指示の働きの助詞であることがわかる。「ニ」のこのような働きは、平郡島にかぎらず山口県域の諸地で聞かれる。

(3)　「〜をミタヨーナ」・「〜をミタイナ」

。ナツイワシジキノアイダ　クーロ　ナッテ　ネー。カベオミタヨーデ。（夏のいわし漁の間、海が黒くなってねえ。まるで壁のようで）〈東〉

。タテアミオミタイナ　カッコーニ　ナル。（建て網のようなかっこうになる）〈東〉

。サカリバナデ　ヒク　トキャ　ジビキアミオミタヨーニ　イヨイヨ……。（盛り鼻でいわし網をひく時はまるで地引き網みたいに、まったく……）〈東〉

「〜をミタヨーナ」のように「を」を言うのは古態である。西では「ウチノ　ジーサンミタヨーニ」（わが家のおじいさんのように）であって「を」を言わない。東でも「を」を言わない表現もあった。「〜をミタヨーナ」は、山口県下の諸地で聞く。

これらのほかにも表現法でとりあげるべきことは多いが後日を期したい。

三　語　彙

1受容の東西差、2東古・西新の傾向、3東西が共有する方言語彙、4造語造文　の順に語彙を見ていく。1から3までの諸語は、「部屋の名称」以外は『瀬戸内海言語図巻』に見えている。

1　受容の東西差

(1)　部屋の名称

平郡島の家の間取り、またその部屋の名称は、東のものについては伊藤彰、亀山慶一、不破勝俊男、三氏の論文[7]にある。一方、西のものは『西浦方言』に見えている。一九九三年に私は東の羽仁と西の伊場で次のように聞いた。

東

オシイレ	オ　ク	ナイショ	ヒドコマ
卍	オモテ	シタノマ	ニ　ワ（土間）

西

オシイレ	オ　ク	ヨコダ	
卍	カモーテ	オモテ	ニ　ワ

東と西のこのような名称の差異は、伝播した名称の受容のしかたの差違と思える。たとえば東では、茶の間を「ナイショ（内所・内証）」と言う。『愛媛の方言』[8]には、県全域の諸地で台所・勝手を「ナイショ」という状況が見られる。一方、西では茶の間を「ヨコザ」（横座）と言う。大島、祝島でも「ヨコザ」である。玖珂郡にも「ヨコザ」と言う所があり、愛媛県の津島でも「ヨコザ」である。

西では客間の名は「カモーテ」であるが、これは「カミテ」の音変化した語であろう。客間を「カミテ」と言う所は広島県、島根県にある。また「オモテ」は東では客間、西では入口に続く部屋の名であるが、これもそれぞれ諸地にある。

(2)　「ナンバ」と「マンマン」

とうもろこしを東では「ナンバ」、西では「マンマン」と言う。「ナンバ」は内海東部域に優勢な語で、中部域にも点々と見えており、平郡東の「ナンバ」は分布の西限である。西の「マンマン」は「ナンバ」から生まれた語であるが、これは大島西部と長島にもある。ちなみに安芸西部域と周防東部域には「マンマンキビ」が優勢である。

(3)　「キンビリクサェー」と「キナクサイ」・「キンヤクサイ」

布・綿などの焼けるにおいを「キンビリクサェー」と言うのは、『図巻』上では平郡東だけである。これは「キノボリクサイ」の音変化語であろう。「キノボリクサイ」は淡路島西南域から周防大島まで、どちらかといえば四国がわに優勢な語である。

一方、西の「キンヤクサイ」は、これも『図巻』上にはこゝ一地だけに見える語であるが、これは「キナクサイ」の音変化語である。「キナクサイ」は九州の内海沿岸域に優勢で、その他の内海域にはまれである。

(4)　「ホボロー　ウル」と「サラー　カベル」

嫁が勝手に実家に帰るのを、「ホボロー　ウル」とは東も西も言うが、西では「サラー　カベル」とも言う。「ホボロー　ウル」は「ホボロー　フル」とともに、主として中国域に広く分布している。「ホボロ」は藁製のかごであるが、平郡でのそれの名は「テボ」であるから、「ホボロー　ウル」は伝播してきたことばとわかる。一方、「サラー　カベル」は『長門方言集』[9]に見えており、『図巻』上に

は九州の沿岸、姫島、平郡西、愛媛県の大三島、岩城島、岡山県の真鍋島にある。

これらのほかにも、「稲架」を東では「カンダツ」・「ナダラ」、西では「ハデ」と言い、潮が満ちて流れの止まった状態を東では「タタエ」、西では「トロミ」と言うなど、受容の東西差を見せる語は多い。

2　東古西新の傾向―西の共通語化

(1)　「ナェー」と「ジシン」

東では昔言っていたことばと断って、地震を「ナェー」と答えており、西は共通語の「ジシン」である。古語「ナイ」系の語は『図巻』上ではおもに九州の沿岸、姫島にある。山口県下では島々にいくらか見られるが、多くは「昔のことば」と説明されている。

(2)　「イワウ」

「イノコ　イオーチツカサーイチューチ　アルクンデス　ヨ。ローソクダイ　スルノー　イオーテクレテ　アルクンデス」（亥の子を祝ってください」と言って歩くのですよ。「ろうそく代にするお金をください」と言って家々をまわるのです）と、東の高年者は子供のころの亥の子の晩の思い出を語った。祝儀の金銭を与えることを「祝う」というのは浄瑠璃などに見えている。

(3)　「オバ」と「シンルイ」

「親戚」を東の羽仁では「オバ」、東の浦と西とは「シンルイ」と答えている。「親戚」の意味の「オバ」は古文献には見えていないが、『図巻』上には周防大島の一地、野島、大津島、広島県の下蒲刈島にある。『香川県方言辞典』によれば佐柳島にもある。古いことばであろう。

このほか東では「渦」を「ゴー」、「つくし」を「トーナェー」、「おてんば娘」を「ケーマンバッサェー」・「ヒチバッサェー」、「嗅ぐ」を「ニオウ」・「カゾム」と答えているが、西はすべて共通語形で答えている。もっとも「平らな」に相当する語としては東が「ヒラタイ」と共通語を答えているのに対し、西では「ノベナ」と方言が答えられていて、単純に「東古西新」と言い切ってしまうことは困難である。

3　東西が共有する方言語彙

グロ（いなむら）・トーブラ（かぼちゃ）・サェータナ〈東〉とサイタナ〈西〉（いたどり）・ドーマル（袖なし）・カリー〈東〉とカルイ〈西〉（背負いこ）・ワガデニ（自然に）

これらは『図巻』上に見た、東西が共有する方言語彙で、大島その他、周辺の島々にも見えている。

4　造語・造文

ある語の語形、あるいは語意が、この島で造られたもの、考えられたものか、他から受容したものかは単純には言えない。文のばあいも同様である。

ここでは大胆にこの島での造語・造文、あるいはそれに類すると思えるものをとりあげてみる。

(1)　「クニカタ」〈東〉

東では、本土を「クニカタ」（国方）と言っていた。

『図巻』上では平郡東と香川県の豊島に「クニカタ」が見えている。『日本方言大辞典』には、東京都大島で本州を指して「クニ」

と言うとある。「クニ」・「クニカタ」は本土とのつながりの自覚を言っているのであろう。一九九三年の今、平郡東ではこのことばは忘れられていて、東西ともに本土を「ジガタ」（地方）と呼んでいる。

(2) 「ヨーラク」（瓔珞）〈西〉

西では稲の花を「ヨーラク」と言う。あの小さな花の花房が朝露にぬれて光るのを、天蓋から垂れる玉の飾りに見立てたのは、いかにも美しく、敬虔である。つららを瓔珞（ようらく）と言うのは大分県であるが、稲の花を「ヨーラク」と言う所は、手元の方言集・方言辞典には見えない。

(3) 「アサナ」（朝魚）〈東〉

「イワショー　ヒーテクルデショー、アサナオ。ソシタラ　ソレオ　イッテ……」（鰯網をひいて来るでしょう、朝の魚を。そしたらそれを釜でゆでて……）〈東〉

七十五歳の女性はこう語った。この「アサナ」（朝魚）がこの女性の造語であるか、東で一般に言う語であるかは確かめていない。「ナ」が魚を言う古語であることはよく知られているが、「朝魚」という古語があったか否かは明らかでない。『時代別国語大辞典上代編』の「あさな［朝菜］」の項に、〈副詞アサナユフナニを「朝魚夕菜尓」（万二七九八）と表記してあることから、ナは植物性の菜（な）には限らないであろう〉とある。

(4) コージンサマ（荒神様）〈東〉

東では一家の主婦、また牛を「コージンサマ」（荒神様）と言う。その心意については「イエノ　シェーカツオ　タスケルノガ　コージンサマジャケ。ウシノコ　ウッチャー　シェーカツヒニ　シヨッタカラ。ヨメサンモ　ノー、ヤッパ　ソコー　マモルケー」（家の生活を助けるのが荒神様だから。牛の子を売っては生活費にしてたから。嫁さんもねえ、やはりその家を守るから）と語った。

主婦と牛とは荒神様のように家を支え、守るという信頼感、期待感がこの比喩を生んだ。もっとも女性に対しては「ビンダレ　ヒマシオ　ユーナ」（女は小理屈を言うな）とも言って身勝手なものと、高年女性は笑っていた。

このように「主婦」を「荒神様」と言う所は『愛媛の方言』にも数地があがっている。また、『綜合日本民俗語彙』は、茨城県多賀郡高岡村（高萩市）で自分の妻を「コウジンサン」と言うと記している。

(5) 「イハイジ」（位牌地）

東では先祖供養のための田畑を「イハイジ」と言う。位牌を守る人、つまり先祖を祀る者が受けつぐ土地（財産）である。生活習俗がそのままことばとなっている。

(6) ヒロシマエ　サザエ　ヒロイニ　イッタ〈東〉・トーフニ　ナッタ〈西〉

これらは「死去した」ことを言う、いわば忌み詞である。なぜ広島かについて東の高年女性は「ヒロイ　クニニ　イッタチューンジャロー　ジャー」（広い国に行ったと言うんだろうよ）と解釈している。「サザエ」は貴重品だとも言った。

死去したことを語るのに「広島へ……」と言う所は山口県域には多い。それは単に「広島へ行った」であったり、「煙草を買いに」

「綿を買いに」「茶を売りに」などさまざまであるが、「サザエ　ヒロイニ」は平郡東で初めて聞いた表現である。受容した表現を自分たちの生活にひきつけて新しく展開したものである。

一方、西では、「トーフニ　ナッタ」が死去したことを言う忌み詞である。「ドコソコノガ　トーフ　トイヤ」（どこそこの人が死んだそうだよ）のようにも言う。山口県下、本土域では「トーフ」を「葬式」の忌み詞として言う所が多い。平郡西の「トーフ」は受容したことばの意味をいくらかずらせている。

これらのほかにも、島の人々のこだわりのない言語生活をしのばせる島ことばはさまざまに多い。

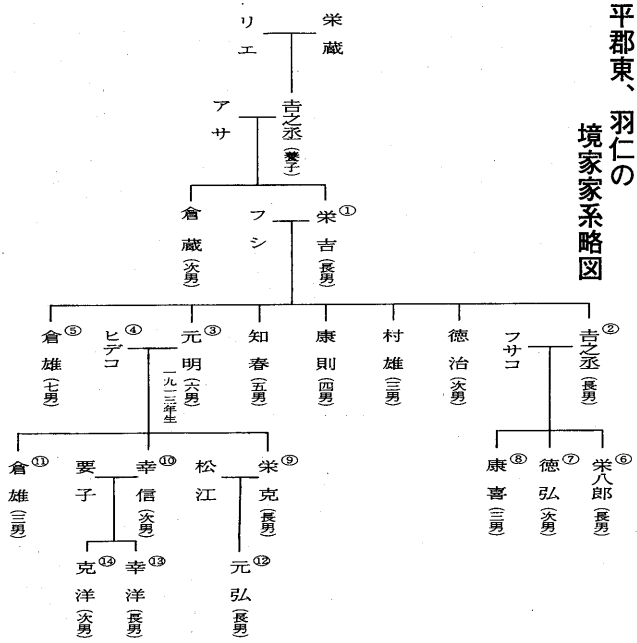
四　命名と呼称

1　命名

平郡東には、生まれた子供の名前に先祖の名をもらうという命名習俗がある。境元明氏は境家の命名を「境家家系略図」のように教示された。図上、女性は除いている。また③④⑩の命名についての教示はこの略図中に書けなかった。命名は次のようにおこなわれている。

①長男　父方の祖父の名の一字をもらう。
②長男　父方の祖父の名をそのままもらう。
③六男　父方の大叔母「モト」の名をもらう。
④六男の妻　実家の叔母の名をもらう。
⑤七男　父方の叔父の名の一字をもらう。
⑥長男　父方の祖父の名の一字をもらう。
⑦次男　父方の叔父の名の一字をもらう。
⑧三男　父方の叔父の名の一字をもらう。
⑨長男　父方の祖父の名の一字をもらう。

平郡東、羽仁の境家家系略図



山口県柳井市平郡島の生活語諸相

⑩次男　母方の祖父「幸助」の一字をもらう。
⑪三男　父方の叔父（戦死）の名をもらう。
⑫長男　父方の祖父の一字をもらう。
⑬長男　父の名の一字をもらう。
⑭次男　伯父の名の一字をもらう。

すなわち、

a　長男は父方の祖父の名を一字もらう。あるいはそのままもらう。最近は父の名の一字をもらったのもある。

b　次男以下は伯叔父の名の一字をもらうことが多いが、⑩のように母方の祖父の名の一字をもらうこともある。また③のように大叔母の名をもらったのもある。

c　女性は伯叔母の名をもらうことが多いらしい。これについては高年女性たちが「オバサンガ　キヨーナジャッタラ　ネ、ソノ　ナオ　ポット　モラウ。ヨー　ニル　モンナンデス　ヨ」（伯叔母さんが器用だったらね、その名をぽっともらう。そうするとその伯叔母さんによく似るものなんですよ）と語った。このことばは、先祖名をもらうのは、〝その人にあやかる〟心意だと述べている。また一方に「名を残す」の心意もあるようで、「ソコノ　ナガ　シタラン」（そこの名がすたれない）という発言もあった。

上野和男氏は日本における祖名継承法を、東北日本は父系型の連続世代継承法、西南日本は双系型の隔世代継承法と説いておられる。平郡東のこのような祖名継承はたしかに西南日本型である。

2　呼　称

東では公的な場では姓を呼ぶが、日常は名前で呼び合っている。その呼び方は「トメヨサー」（留代さん）のように接尾辞「サー」を添える。あるいは「トメネー」のように親族称を添えて言うこともあるが、「トメ　ヨイ」のように呼び捨てのことも多い。留代さんを「トメ」、キソエさんを「キー」のように言うことを「**片名**（かたな）を呼ぶ」と言い、片名を呼ぶことがさかんであるという。また明治生まれの女性は、たとえば「マン」は「オマンサー」、「リエ」は「オリサー」のように「オ」を冠して呼ばれていたという。

西では「アニサン」「ネーサン」、「オイサン」「オバサン」を姓に添えて、「オガタノネーサン」のように言う。隣人を親族呼称で呼ぶのである。同一人物を「ネーサン」とも「オバサン」とも言うのは呼び手の年齢による。これらはいくらか改まり意識の呼びかけであるが、「マツコネー」（松子姉）、「ミツニー」（光兄）と、親族称を接尾辞として添えた呼称は同年輩の者のくだけた呼びかけである。姓を呼ぶ「アサノウミサー」（浅海さん）はあらたまり意識の呼称であるが、「アサノウミサン」はいちだんと改まった呼び方である。

西にはまた「サエジローヨシ」（オ次郎の息子の好治（ヨシハル））、「チョーベーキヨ」（長兵衛の息子の清重）のように父の名を冠した呼び名もある。同名が多いからという説明があった。「サントクミツ（三徳光）」と呼ばれる中村光久氏は以前に原田三徳（ミツノリ）氏の住んでいた家に入ったのでこう呼ばれると語られた。

多様な呼称は隣人認識、またその遇し方の多様であることを見せている。

おわりに

東と西の方言差に注目しながら、また一方にどのような記述が平郡島の生活語を活写し得るかと考えながら記述を進めてきた。まず東西の方言差については、一つには、より早く地方共通語につくか、古くからのものを比較的よく残しているかの差異であると言えそうである。また一つには、瀬戸内海域を運ばれることばの受容のしかたが東と西ではとりどりであったことが東と西の方言差をもたらしている。このことは『瀬戸内海言語図巻』上の平郡島の、東と西のことばのそれぞれが瀬戸内海全域にはどのような分布状況であるかを見る時、明らかである。なお今回はふれることができなかったが、周防大島の方言、また愛媛県西北部方言とのかかわりにも注目せねばならないと考えている。たとえば大島に「シコイッパイ」（しこたま）という副詞があって、平郡東に「シコ　ツケタ」（いわしがどっさりとれた）ということばがあり「チンチョー」は伊予市などと平郡東では物が少し違うなどのこともあった。

生活語を語るのに平郡島のばあいは、私は人の名の命名、地域社会内の呼称をもとりあげた。それぞれの地域に則してどのように生活語をとりあげていくか、私自身の課題である。

注

(1) 藤原与一『瀬戸内海言語図巻』上・下巻（一九七四年、東大出版会）
(2) 三浦章『山口方言　方言資料集Ⅱ—平郡島西浦方言—』（一九八一年、山口大学教育学部国語研究室）
(3) 境吉之丞『柳井市平郡島史』（昭和四十五年、柳井市立図書館）
(4) 藤原与一『方言敬語法の研究』—昭和日本語方言の総合的研究第一巻—（昭和五十三年、春陽堂）
(5) 藤原与一『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）』（昭和六十一年、春陽堂）
(6) 森田道雄『山口県柳井町方言集』（方言資料第四輯、昭和六年、一言社）
(7) 伊藤彰『防長　海辺の民俗』（昭和五十六年、東洋図書出版）
亀山慶一「平郡島の民俗（上）」（『日本民俗学会報』第五〇号、昭和四十二年、日本民俗学会）
不破勝敏夫「平郡島の壮年隠居制」（『山口経済学雑誌』第23巻第3・4号、昭和49年、山口大学経済学会）
(8) 武智正人『愛媛の方言—語法と語彙—』（研究報告Aシリーズ第4号、昭和32年、愛媛大学地域社会総合研究所）
(9) 重本多喜津『長門方言集』（昭和51年、国書刊行会復刻）
(10) 上野和男「日本の祖名継承法と家族—祖先祭祀と家族類型についての一試論—」（明治大学『政経論叢』第五十巻、第五・六号、昭和五十七年）